「情報処理学会論文誌：数理モデル化と応用」の編集にあたって

城 和 貴†

今年度第 3 回目の TOM の発刊です．といっても，TOM16 から 1 カ月しか経っていません．実は TOM16 の編集作業終了直後に事務局から，「今年度にもう 1 冊発刊予定ですので…」という半ば脅しともとれる連絡を受けまして，超特急で TOM17 の編集作業を行いました．平成 18 年度の論文投稿数は過去最高を数えまして，MPS59（5 月），MPS61（9 月），MPS62（12 月），MPS63（平成 19 年 3 月）の投稿数はそれぞれ，14 件，13 件，15 件，17 件で，年間総計 49 件でした．ちなみに研究会での口頭発表件数はそれぞれ，23 件，18 件，28 件，28 件の 97 件に加えて MPS60（6 月，ラスベガスにて PDPTA2006 と共催）の 17 件を合せると実に 114 件と，夢の大台に到達しました．ちょうど 1 年前に「TOM 編集委員倍増計画」を実施し，編集委員の数をほぼ倍増させたのですが，更に委員の数を増やさなければならない状況になりつつあります．

TOM17 では，2005 年度研究会非連動投稿から 1 編，2005 年度シンポジウム特集合に投稿されたものから 1 編（TOM16 に間に合わなかったもの），2006 年 5 月の MPS59（名古屋）から 6 編，2006 年 9 月の MPS61（大阪）から 4 編，2006 年 12 月の MPS62（東京）から 1 編のオリジナル論文と，MPS61 から 2 編の事例紹介論文の合計 15 編を掲載しています．TOM17 に関する採録論文数/投稿論文数は 15/30 で採択率は 50%でした．

今回，TOM の記録が塗りかえられました．オリジナル論文の「Influential 領域を導入した適応型光近接効果補正技術の提案」は，2006 年 11 月 21 日に投稿され，同年 12 月 21 日に一発採録，2007 年 3 月の出版ですので，投稿から出版まで 4 カ月という最短記録となりました．これまで TOM は，投稿から採録までの期間が短いということを売りにしていましたが，今後は出版までの期間も短くするように頑張りたいと思います．なお，「高額所得モデルのベキ乗指数と競争ルールについて」は，2005 年度シンポジウム特集に投稿された論文で，前回の TOM16 の掲載に間に合わなかった最後の 1 編です．TOM ではシンポジウム特集号に掲載された論文もオリジナル論文/事例紹介論文の分類をしておりますので，今回はオリジナル論文として TOM17 に掲載したことを報告しておきます．

ところで，よく受ける質問に，TOM 独自の研究会連動投稿と研究会非連動投稿の違いは，というのがあります．正確にいうなら，研究会連動投稿は研究会連動投稿（口頭発表あり）と同（口頭発表なし）に分かれます．当然のことながら，非連動投稿は新たな口頭発表はありません．TOM の設立当初の考えとして，長い査読期間を何とか短縮したい，というのがありました．査読結果が出ても，照会後判定と条件付採録が延々とループする，という事例も昔あったそうです．そこで，判定結果は著者の口頭発表を直接聞き，クリティカルな質疑を行った後にすれば，判定までの期間を劇的に短くすることができるのではないかと考えたわけです．そういう経緯があるため，TOM への投稿は口頭発表が必須となります．ただ，投稿と同時に口頭発表とすると自由度が狭まるため，同時でなくとも発表実績があれば，研究会連動もしくは研究会非連動の投稿が認められます．連動と非連動の違いは，判定時期を保証するかどうかです．非連動投稿の場合，査読に時間がかかる場合があるということを承知していただいたうえで投稿してもらっています．

今号の採録論文 15 編の担当編集委員は，池田大輔，伊藤実，石原靖哲，北栄輔，栗原聡，佐藤彰洋，鈴木智也，高田司郎，高階知巳，馬場謙介，Paul Horton，古瀬慶博，堀田一弘，宮崎浩一となっています．

配布部数につきましては，900 部を予定しております．なお，論文誌の定期購読制度もありますので，ぜひ，こちらもご利用ください．また，研究会開催記録，研究会登録案内，投稿案内などに関する最新の情報はすべて WWW ページ上に掲載しております．すべての情報は研究会ウェブページ（http://www.ipsj.or.jp/sig/mps/）よりたどることができますので，MPS 研究会および論文誌 TOM に関しては，そちらをご参照くださいますよう，お願い申し上げます．

† 情報処理学会論文誌「数理モデル化と応用」編集委員長
奈良女子大学